

緑爽会会報 No. 181

2022年8月25日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 荒井正人



デザイン・制作 関塚貞亨

〜〜 《報告》 〜

笑顔溢れた3年ぶりの暑気払い

開催日：7月16日（土曜） 場所：中華料理「西安」

参加者：20名（後掲写真参照）

7月第三土曜日の16日（土）、久しぶりの暑気払いが開催されました。2019年の忘年会以降、コロナの関係でルームは使用に制限が生じ、総会・忘年会も含めてこの二年間、集まることが出来ませんでした。非常事態宣言、まん延防止措置などの間を縫って山行や講演会は開催できましたが、やはり多くの会員が一堂に会して語り合うことは出来ませんでしたので、何とかして開催できないものかと方法を探った結果、今回のような形を思い立ったわけです。4月以降のコロナ新規感染者数などの動きを見ても、これなら出来ると思ったのですが、7月に入って徐々に感染者が増え始め、実施するかどうか幹事方と相談を重ねて開催を決定しました。本当にその直後の動向からすると、滑り込みセーフと言ってもよいタイミングでした。



後列左から：石塚嘉一、藤下美穂子、荒井正人、夏原寿一、竹中彰、南川金一、鳥橋祥子
栗城幸二、渡部温子、福田光子、相良泰子、小林敏博

前列：有岡純子（手前）、平野紀子、富澤克禮、川嶋新太郎、梨羽時春、近藤緑、山本良子、島田稔

来場されると皆さん「お久しぶり」と声を交わし、リアルで話ができることを待ち望んでいたかのように自然と笑顔が溢れ、やはり顔を合わせて語り合うことの大切さ、嬉しさを感じました。遠方からの福田さん、平野さんの出席、梨羽さん、近藤緑さん、渡部さんと創設会員の出席も嬉しいことでした。一方で最近入会の竹中さん、有岡さん、栗城さんも出席され、各テーブルで話に花が咲き、和やかなひとときとなりました。

中華料理の丸テーブルは通常 8 人掛けですが、5~6 人としてもらいました。一足早く帰られる平野さんがおられるうちに集合写真を撮り、山川会員差し入れのブルーベリーを最後に味わって散会となりました。ルームが使えない以上、今後もこうした方法での開催が考えられますが、その経験則を得られたものと考えています。 (写真提供：石塚嘉一)

富澤さんのお話「高尾山の魅力」

会の冒頭には富澤前代表から「高尾山の魅力」と題してお話をさせていただきました。資料として、レジメと話の中心でもある花の写真を 16 種類プリントしたものが配布され、それを基に、高尾山との関わりから、最近の登り方や回数、健康登山のことなどお話いただきました。



最初に高尾山に登ったのは 3~4 歳のことだそうですが、奥様に誘われて植物観察会に参加したことがきっかけとなり、奥様亡き後はお嬢さんとお孫さんとでの家族登山や足慣らしのための登山が中心だったとのこと。10 年ほど前に「健康登山」と出会い、体力維持とストレス解消には良いし、仲間もできたそうです。また顔を合わせる方の中には植物に詳しい方もいて、学ぶ機会に恵まれたとも。高尾山にはイギリス全土と同じくらいの、1500~1600 種類の植物があり、最初に高尾山で発見された植物も多く、菱山忠三郎著「高尾山花と木の図鑑」によれば 63 種類あるとのこと。名前に「タカオ」と冠されている「タカオスマレ」「タカオヒゴタイ」などが良く知られています。去年は年間 272 日も登られたということですが、それでも今年になって初めて見た花などが 21 種類もあるとのこと。また、変種や交雑種が沢山あることや、年によって咲く場所が変わったり、咲き具合も異なるなどの変化があること等を知ると益々植物に興味をわいてくるとのこと。そんなことで、今年も昨年と同じようなペースで高尾山に通われています。

最後に高尾山でもシカが増えていること、毎年珍しいスマレなどが盗掘されている問題、あるいは踏み荒らしや花の切断問題などにも触れられましたが、そこはさすがに自然保護委員長経験者の視点だなあと思ったことでした。(報告：荒井正人。写真は今年になって初めて見た花の中から 3 種類を掲載しました。なお、当日配付資料をご要望の方は荒井までお申し出ください)

フモトスマレ

アリドオシ

トンボソウ



さがみこベリーガーデン見学と BBQ

実施日：6月21日（火）

参加者：16名（写真参照）

緑爽会6月山行として2回目のさがみこベリーガーデン訪問を行いました。今回は正式オープン後で、ブルーベリーの実も濃い紫色になり、手に取るとぼろっと取れるほどに熟していました。1000本を超えるブルーベリーの木があり、33種類のブルーベリーを摘み取ることができ、訪問する時期により楽しめる品種が異なるとのこと。ポツンポツンと少し雨が降る天気でしたが、太陽光パネルが屋根になり、濡れることもありませんでした。

早速摘み取り可能な品種を教えてください、熟した実を食べたり、お土産用にパックに詰めたり、ついつい夢中になってしまいました。品種により粒の大きいもの、小さいもの、甘味の強いもの、酸味が感じられるものなどがあり、食べ放題を楽しみました。間違えて完熟前の実を取り、「おっ、酸っぱい」と思うことも、これもまた自分で収穫することの楽しみです。

ブルーベリー摘みを終わると、次はお楽しみ BBQ。途中仕入れてきた飲み物をカップに注ぎ、さがみこベリーガーデンで用意していただいた野菜や肉を炭火で焼きます。野菜は周辺で採れる地



BBQ 風景（手前に見えるのがホイル焼き）

さがみこベリーガーデンは、周囲が木々に囲まれ、中央に広くオープンになった広場もあり、子供たちが駆け回って遊ぶ場所にもなっています。この広場の一角にミツバチの巣箱を設置してあり、たくさんのミツバチがウヨウヨと集まり、働いている様子も見せていただきました。この蜂たちは、ブルーベリーの受粉にも一役買っている大事な働き手のようです。

最後はブルーベリーのスムージーのデザート。アルコールが回ってほろ酔い加減で少しほてっているところに、冷たくて、甘いスムージーはもっと飲みたいと思うほど最高でした。当初は各自で作る予定でしたが、ほろ酔い加減で動けなくなった我々を見て、すべて山川さん側で作ってくださいました。

終わり近くになって雨が少し強く降り始めましたが、パラソルの下は雨など関係なく、ブルーベリーの木々を背景に集合写真を撮り、みんな満足して帰路につきました。また3回目も来られたらと話しながら…。



スムージー

（報告：横関邦子。写真提供：横関邦子・松川征夫。次ページ集合写真は前号の再録）



左から（後列）田村佐喜子、相良泰子、富澤克禮、田井具世、松本恒廣、小清水敏昌、渡邊貞信、
横関邦子、栗城幸二、荒井正人、山川勇一郎社長
（前列）夏原寿一、鳥橋祥子、渡部温子、山川陽一、小林敏博、松川征夫

【付記】 昨年の秋に初めて訪問した時は、まだ摘み取り農園としてのオープン前であり、また季節的にもブルーベリーの実がなる風景は想像するしかなかった。しかし今回は、立派に実が成り、自ら摘んで頬張る醍醐味を存分に味わうことが出来た。思ったよりもたくさん食べられるものだと感じた。その後、NHKテレビの「ひるまえほっと」という番組で紹介された他、多くのメディアで紹介されている。その中で太陽光発電に関しては、地元エリアが災害で電力供給できなくなった時に、ここで発電された電力を供給する体制が出来たということも紹介され、地元と色んな面で「シェアリング」というか共存が進んでいると感じた。
なお、この夏は8月21日をもって閉園となりました。



500円玉くらいの大粒も
（荒井記）

会報の送付に関するアンケート報告

会報の送付に関してアンケートを実施しました。ご協力いただきありがとうございました。

これは今すぐに会報をデジタル化しようとか、郵送をメールに切り替える、などという目的で行ったものではありません。今は日本山岳会のホームページから入っていくと、同好会のコーナーがあり、そこで会報のバックナンバーも見られるようになっていきます（カラーで）。ただ、そこでは個人情報や、著作権上問題がありそうな記事や写真は削除していますので、郵送でお送りしている

ものと全く同じではありません。(例えば山行申込連絡先の電話番号やアドレスも載せていません)では綺麗なカラー写真での会報をご覧いただくにはどうしたら良いかという、メールにファイルを添付して送る、という方法が考えられます(カラーで印刷する方法もありますが、これですと、今の印刷経費の6倍ほどかかり、ちょっと会計上厳しいと判断しています)。その方法で受信できる方には、今後そうしようと思っていますが、この181号はアンケートの回答に基づいてメールに添付する方法と、郵送と併用でお送りします。添付ファイルはダウンロードして見ていただくことになりませんが、それがうまくいかないとか、パソコンに不具合があるとか、様々なことも想定しておかないといけないと思っていますので、この年度末までは併用でお送りすることを考えています。

なお、アンケートの回答を集計した結果は以下の通りです。(回答総数 42名/60名)

1. 今まで通り郵送して欲しい。・・・・・・・・・・・・・・・・11名
2. パソコン(スマホ)で受信できるが郵送が良い。パソコンには送らなくていい。・・7名
3. 郵送が好ましいが、パソコンに送ってくれるならそれも欲しい。・・・・・・・・11名
4. パソコンに送ってくれるだけで良い。・・・・・・・・13名

※今後のスケジュールを以下のように考えています。

- ・184号まではメール添付と郵送を併用する。ただし、パソコンで会報を管理・保存出来るので、郵送は要らないとの申出があれば、いつからでもそのように対応いたします。もちろん、やはり紙ベースで欲しい、との要望があればいつでも郵送でお送りできます。
- ・アンケートの回答を頂いていない方には個別に送付の仕方をお聞きします。
- ・一方で、送付の仕方や会報の工夫など、いろいろ検討していきます。
- ・来年の総会時期に、もう一度送付方法について確認させていただく予定です。

※メール・ハガキで回答いただく中で、いろいろご意見もいただきました。全てを掲載することは出来ませんが、いくつか下に掲げます。大変参考になりましたので、今後に活かさせていただきます。

- 「緑爽会会報」は山岳書籍の中の一冊という位置づけ。ファイルしている。(同様意見あり)
- やはり、じっくり読むには紙面が良い。皆の意見を聞いて進めるのが良い。
- 突発的なことでメールが見られないこともあり、紙ベースもあると良い。
- デジタル化が進んでいるが単純に「紙→メール」とすることが逆効果になることもある。

前出の内容にも関係しますが、今は日本山岳会のホームページから緑爽会会報を見ることが出来ます。アーカイブでは、古いものも見られ、2011年の100号から見ることが出来ます。会員でなく、不特定多数の誰でもが検索していけば見られるわけです。そのことで、例えば、渡邊貞信さんの「岡野金次郎ファミリーの探究」の記事を見て、郷土史を調べている方から連絡があり、お会いして情報交換出来た、といったメリットもありますが、一方で今の時代、様々なリスクもあります。それで、会報に投稿いただく時は以下の通りご注意ください(荒井正人記)

《他人の著作物を利用する場合は著作権者の了解が必要です》

新聞・雑誌や書籍に掲載された記事・文章、写真、イラストなどをコピーや印刷物にして配布する・メール配信する場合は、原則として著作権者(新聞社、出版社、作者など)の了解を得ることが必要です。インターネットからの情報の利用も同様です。著作権法に抵触しないよう著作物の適正利用に十分ご留意いただきたくお願いいたします。

がある。新十津川は、1889（明治 22）年の奈良県十津川村の大災害被災者が移住して拓いた村で、この年は開基百年だった。入植した年を開基としている。石狩川流域に見る典型的な氾濫原らしく、平坦地に水田が広がっている。宿を決めてから翌日のタクシーを予約するためタクシー会社へ行く、暇を持て余していた社長にとって、東京から山登りに来たという客は願ってもない相手だった。村の話題が次から次と出て、百年記念行事として大相撲を呼んで新十津川場所を開いたが、宿が足りない、相撲取りは一般家庭に泊めた。朝夕がフロに入ると…、などといった話まで。

5時に頼んであったタクシーに乗って出発。登山口 5時半。登山道は明瞭であり道標もあるから、ひたすら登ればよい。ところが、上の方に、山の斜面をトラバースする林道が見えてきた。登山道は林道を右に見送り、写真中央に見える待根山（マツネシリ）の東尾根を登り、ピーク手前から右に巻いて主峰との鞍部に出た。登山口から 2 時間ほどで頂上だった。天気はよいものの、水蒸気が多く石狩川や周辺の街ははっきりしないが、空知平野や石狩平野までをも見渡すことができ、陸地測量部が 1 等点（補点）を置いたのは当然



砂川から望むピンネシリ。中央のピークが
国土地理院地形図の待根山（マツネシリ）

と思われた。三角点の北側にドームのような建物があった。開発局石狩川開発建設部の「ピンネシリレーダ雨量観測所」とある。途中で見えた林道は、建設資材荷上げと作業員輸送、それと保守管理のためのもので、北側から頂上まで上がって来ていた。石狩川に流れ込む雨量の観測地点としても格好の地点であることは素人にも理解できた。しかしこの林道は、目をこらすと函館本線の車窓からも見えるもので、もう少し何とかならなかったのかとの思いがした。夕方の便で東京へ帰るので、ゆっくりとしてはいられない。迎いのタクシーを 9 時に頼んであり、早々に頂上を後にした。

もう一つ残念な話があった。この山にヒグマはいないというのである。北海道の山はどこであれ、ヒグマに出遭うことを想定して登るものである。めったに遭うものではないが、付き合い方を心得て登るのが北海道の山の特色であると言える。ヒグマがいなければ結構というものではない。ところが、残雪期の山にスノーモービルで入り、ライフルを使うから、撃ち損じることなく確実に殺すというのである。その結果、ピンネシリにはヒグマはいなくなったという話だった。ヒグマが人為的に淘汰されることのほうが恐ろしく、人間の傲慢さがいやらしい。

憧れたピンネシリの頂上に立てたのは嬉しかったが、何十年かぶりで出逢った久恋の彼女の人生は波乱に満ちたものだったように窺えたようなもので、満たされない思いが半分だった。

高澤光雄編『北の山の夜明け』（2002 年日本山書の会発行）には「蝦夷地山名辞典 稿」（渡辺隆編著、高澤光雄監修）や「明治前 蝦夷地探検開拓年表」（高澤光雄編）など貴重な情報が載っている。前者は「松浦武四郎など幕末以前の地図・文献など 33 点に記された山名について、…その所在地と掲載されていた文献名を山別に纏め、由来や語源などの考察を試みた。つまりところ蝦夷地山名の辞書である」というもので、収録した山名の総数は 1,226、うち幕末以前の旧記の山名は、アイヌ語およびアイヌ語系と思われる山名が 851、日本語の山 82、外来語の山 2、合計 935 という大変な労作である。国土地理院の地図では主峰をピンネシリ、南のピークを待根山としている。待根山はアイヌ語のマツ子シリで、同書によると、ピンネシリは〔男である・山〕であり、マツネシリは〔女である・山〕で、アイヌは 2 つのピークを夫婦と見做していた。

近藤信行先生の訃報に接して

相良 泰子

ご訃報のお知らせはあまりにも突然で、吃驚しました。

奥様の緑さまとは7月16日、緑爽会の暑気払いで久しぶりにお目にかかり、先生のご様子をお伺いいたしましたところ、つい最近、テレビ面会でご家族と共にお話された時はお元気で良く召し上がっていらっしやるとのことでした。私は大変嬉しく思い、秋になってコロナが下火になれば、一緒に先生をご訪問をと約束まで致しました。

でも、その暑気払いの席で、施設からの電話を受け、翌日に塩山に向かわれたそうです。緑さまは、お苦しみなく逝かれたことは幸いだったと話しておられました。とはいえ、内心のお辛い気持ちをお察するに何とお慰めしたらよいのか適当な言葉が見つかりませんでした。

私が先生とお目にかかったのはただ一度で3年前でした。

その当時、先生は山梨県塩山の施設でご生活されていらっしやいました。緑さま、四国支部の坂東さん、小島烏水の研究をしていた米国留学生のアーロン・ジャスニーさん、烏水祭に参加したポルトガル人のエリザベスさん、私の学校時代の同級生で当時中央公論社の社長秘書をしていらした近藤夏子さんの6人で伺いました。

車椅子でおみえになった先生は、大勢でご面会に伺ったので、面食らわれてしまったことごさいます。それでも嬉しそうに、おひとりお一人と楽しく、お話をされました。

烏水の孫の一人として初めてお目にかかった私に、心温まる眼差しを向けてくださり、感激ひとしおでした。あの日の訪問のことは今でも深く心に刻まれています。

信行先生は烏水の研究のため、中央公論社をお辞めになったそうですが、烏水が滞在した当時の取材に米国まで足を運ばれました。

烏水は10年ほど米国に滞在いたしました。当時、私の母は長兄、次兄と日本で教育を受けておりましたので、同行しませんでした。でも二人の妹（私の叔母たち）は同行しましたので、『小島烏水一山の風流使者伝』の出版に当たって、信行先生と電話や手紙で随分やり取りがあったようで、米国滞在中の烏水の生活の様子や様々なメモ、手紙その他の資料の提供をしたようです。我が家にも先生ご自身からの電話があり、私が受けたこともありました。母を含めた3人の姉妹はいつも会っていましたので、私も傍でよく叔母たちの会話を聞いておりましたが、1978年の出版と、同年、信行先生が大佛次郎賞を受賞されたと聞いて3人で手を取り合って喜んでいた光景を今もはっきりと覚えています。

思えば私と四国支部の皆さん方を始め日本山岳会の皆さん方とご交流を頂くようになったのは信行先生のお導きであったと思います。本の出版により小島烏水という名が世に知られるようになり、信行先生の四国でのご講演をきっかけに、四国支部が生まれ、小島烏水祭が生まれ、烏水の孫の私にお声が掛かったのですから。（写真は2013年4月四国支部創立記念講演時）



信行先生はきっと今頃、祖父をはじめ、日本山岳会の先輩方と楽しく語らっていらっしやることでしょう。改めて感謝の意を表しますとともに心からのご冥福をお祈り申し上げます。

新宿区内富士塚巡り

小林 敏博

東京 23 区内には、現存する富士塚が 60、あるいは 70 を超えるといわれている。

富士塚は富士講の始祖・長谷川角行〔天文 10 年（1541）～正保 3 年（1646）〕の四世（あるいは五世）弟子である月行に弟子入りし修行した伊藤伊兵衛こと食行身禄〔じきぎょうみろく：寛文 11 年（1671）～享保 18 年（1733）〕の教えに基づき、身禄の弟子・高田藤四郎が安永 8 年（1779）、早稲田の水稲荷神社の境内に築造した高田富士が始まりと言われている。往時、身禄の教えは庶民の間に瞬く間に広がり、江戸後期には「八百八町に八百八講」といわれるまでに大衆化して、以降各所に富士塚が築かれた。

文明開化された明治以降、昭和に入っても富士塚は造られている。ただ、戦後の高度成長期を迎えて富士塚は廃棄・消滅したり移築されたものがあつたりと、築かれた当時の姿を留める塚は意外に少ない。23 区内には当初の姿を残して国の重要有形民俗文化財に指定されている富士塚は、下谷坂本富士〔小野照崎神社、築造：文政 11 年（1828）〕、江古田富士〔浅間神社、同：天保 10 年（1839）、一説には文化年間〕、豊島長崎富士〔浅間神社、同：文久 2 年（1862）〕の 3 件のみだ。登拝できるのは富士の山開きである 7 月 1 日などといずれもかなり限定されている。比高はそれぞれ 5、8、8 m、直径 16、30、21m と見上げるほどの雄姿で、往時の講中の信仰心がうかがわれる。

私の住んでいる新宿区には 7 つの富士塚がある。緊急事態宣言発出中のさなか、山へも満足に行くことができないので、ある日の午後、区内の富士塚巡りをしてみた。

まずは神楽坂をスタートして早稲田通りを西へ進み、穴八幡神社の交差点を過ぎて水稲荷神社脇にある高田富士へ向かう。もともとは早稲田大学構内にあつたが、昭和 30 年代の大学の敷地拡張に伴い、水稲荷神社とともに富士塚も大学西側にある甘泉園公園横へ移築されている。ただ、神社参道側からも東側道路からも手前の建物や壁が塚を隠して拝むことはできない。甘泉園内の遊歩道の柵を越えた辺りからようやく山頂に安置された石祠の屋根がわずかに望める程度だ。高田富士は 7 月第 3 月曜（海の日）とその前日の日曜 2 日間だけ登拝が許されている。新宿・牛込地区で唯一現在も活動している丸藤宮元講がこの期間だけ行衣やマネキ（講社の名前や講紋などが記された旗）などを展示しており、見応えがある。

高田富士をあとにして、箱根山通りから総務省統計局の西側を過ぎて抜弁天から新宿文化センターへ向かう道を下る。ちょうど下った交差点を左に進むと、西向天神社の鳥居がある。一段高い境内西南の、崖に面した場所に東大久保富士が築かれている。境内からは比高 2 メートルほどだが、崖下から見上げると 10 メートルを超えるような姿を眺めることができる。この塚は四谷谷町丸谷講により天保 13 年（1842）に築造されたといわれているが、大正 14 年に再築されたとの石碑が建っている。崖側の斜面は雑草に覆われていて、黒ボク石（溶岩）も大分隠れてしまっているが、丸に谷をあしらった講紋のある甘



東大久保富士（崖下から）

六夜塔や小御岳石尊大権現と刻まれた石碑、いくつもの合目石を見ることができる。富士塚そのものは柵に囲われて普段は登拝できない。7月1日のお山開きの神事の後に参列した人の登拝が終われば門扉をすぐ閉めるということで、登拝はわずかな時間に限られているようだ。

次に訪れたのが西大久保富士。文化センター通りから東新宿の交差点に出て職安通りを西に進み区役所通りに入った左にあるのが稲荷鬼王神社。新宿山ノ手七福神の一つである恵比寿を祭っている。富士塚は境内東端にあり、本殿と社務所の間にある狭い参道を挟んで築かれている。由緒によれば、「昭和5年 西大久保の厄除け富士として復興される事になり、霊峰不二の石をはじめ全国からの銘石をとりよせ建立」され、「しかし戦中、帝都空襲の為、石の基盤石がゆるまり、縮小・移動を繰り返した結果、現在の形に落ち着いた」とある。一〜四合目は参道の北側に、五合目〜頂上まではその南側に別れて築かれた、珍しい形となっている。北側の塚には合目石のほか、小御岳石尊大権現、御胎内、馬返しなどの石碑があり、南側の塚には合目石、大澤の石碑、頂には小祠がある。参道は「富士の胎内に通ずる道」と由緒には記されている。ただ、ネットで調べてみると、築造当初は10メートルの高さを誇っていたようで、社殿再建の際に二分してしまったようだとの記述もあるが真偽はわからない。

「お胎内に通じる道」を抜けて、次に向かったのが歌舞伎町の脇にある花園神社。境内の北東に摂社・芸能浅間神社の石柱が建っていて、その奥に比高1.5メートルの新宿富士が築かれている。築造時期は不明だが、浅間神社の創祀が昭和3年(1928)とあるので、富士塚も古いものではないと思われる。正面に石段があり、7、8歩で頂の小祠に登拝できる。「元講社」や「富士分教會」などと刻まれた石碑などが安置されている。「芸能」とうたっている神社だけあって、ビートたけし、

ビリー・バンバンや十一代桂文治など芸能人の名前を記した奉納版が富士塚を囲むように並んでいるほか、塚の脇には「圭子の夢は夜ひらく」の歌碑が設置されている。



成子富士

花園神社から靖国通りに出て、大ガードをくぐって向かったのは、東京メトロ丸ノ内線西新宿駅に近い成子天神社である。成子富士は、「大正9年(1920)8月に天神山という小山に富士山の溶岩を配して築かれたもので、区内では最後に築かれた富士塚」との区の説明板にある。比高は12メートルで区内では最大規模、都内でも最大級という。他の富士塚に比べ石碑は少なく、麓に湯殿山と刻まれた碑が目立つ。登拝は以前、大晦日から1月7日までの期間だけだったが、現在はいつでも登れるようになった。登山道はしっかりとできて、中腹からは手摺りが張り巡らされており、気軽に登り降りができる。山頂には木花咲耶姫命(このはなさくやひめ)を祭る石祠が安置されている。ここまで歩いて夕方になったため、残る一つの上落合富士(月見岡八幡神社)は日を改めて訪れることにする。6つの富士塚巡りの所要時間は塚の登拝や見学を含めておよそ3時間半。

富士の山小屋はコロナ禍で現在も宿泊人数を制限しているので、富士登山もこれまでのように気軽に登れるような状況ではないようだ。従って、空いた時間を見つけて気軽に地元の小さな富士山を訪れるのもよいかもしれない。往時はどの富士塚からも山頂から富士山を眺められたという。ただ、今は立ち並ぶビル群により富士は眺められないが、想いを馳せることにしましょう。

峠

横関 邦子

山の日のお休み、講演会に出かけた。講師は、秋に緑爽会でも講演して下さる予定の大久根茂氏。同氏の講演については、緑爽会の講演会にご参加いただけたらと思いますが、演題の「峠」の漢字に目が留まり、その語源にも興味を持った。

漢字の「峠」は、室町時代に日本で作られた和製漢字で、見た目通り「山」「上」「下」からなる会意文字である。山道を登りつめたところ、山の上りと下りの境目を示している。

また、「たお」は湾曲を意味し、稜線は峰と峰をつなぎ湾曲線を描いていることから稜線を「たお」と呼んだ。「とうげ」とは、この「たお」を越える場所を指し、「たおごえ」から、「とうげ」と変化したとの説もある。

さらに、峠は「たむけ」と呼ばれたこともあり、室町時代以降、「たむけ」が「たうげ」に転じ、さらに「とうげ」に変化したともされている。そもそも「たむけ」とは「手向け」のことで、神仏に物を供える意味で、峠に道の神がいると信じられ、通行者が旅路の無事・安全を祈って手向けをしたと考えられている。道祖神などの石仏のあるところも多い。

「峠」には、行先の方向を示す道しるべ、国境や境界線、歴史物語の残る場所、など様々な意味があると理解しているが、山歩きをしながら、峠を単に歩く目標とするとか、通り過ぎたり、休憩の場所とするだけでなく、それぞれの峠の歴史、名前の由来などを調べてみるのも面白いと思う。

今後の山歩きの楽しみを峠にも広げたら、山に対する理解も深くなるかもしれない。

～～《予告など》～～

9月山行 初秋の山「要害山」から富士山を眺める

前号でお知らせしたように、戦国時代の山城（大倉砦）があった山梨県上野原の要害山（536m）に登ります。今回は、尾続山から実成山、コヤシロ山、要害山とゆっくり回り鏡渡橋に下ります。それぞれのピークやビューポイントから富士山が望めます。

実施日：9月27日（火）雨天中止

集合：JR中央本線上野原駅南口富士急バス乗り場 8時45分

（高尾駅8時24分発大月行に乗車すると、8時41分に上野原駅に着きますが、少し慌ただしいです。トイレのことなどを考えると、1本前の高尾駅8時01分発甲府行きなら8時25分に到着し余裕があります。）

コース：上野原駅バス乗り場 8：50⇒9：10 尾続→尾続山→実成山→コヤシロ山→要害山→山神社
→鏡渡橋→新井バス停 15：19⇒上野原駅 歩行時間約4時間

担当：CL 石塚嘉一、SL 小林敏博

持ち物：昼食ほか一般日帰り登山装備

申込：9月20日までに下記へお申し込みください

石塚嘉一：

小林敏博：

*当日の天候が思わしくない場合は実施の可否を決定の上、連絡を入れるようにします。



10月講演会 「関東地方を取り囲む峠を歩く」

開催日：10月22日（土） 14時～16時 （一般会員も対象にしています）

場 所：JR 武蔵境駅北口 スカイルーム 1

講 師：大久根茂氏

埼玉県立川の博物館 研究交流部長。(季刊『山の本』に「峠の履歴書」を連載中)

8月11日(祝)に埼玉支部主催の講演会で「峠歩きは面白い」と題して講演。

定 員：40名 ※会報「山」9月号でも告知しますので、申込みは早めに下記へ

担当・申込：荒井正人

11月山行

JR 奥多摩駅、白丸駅周辺の歴史道を歩くハイキングです。約5kmの行程ですが奥多摩の歴史を物語るいろいろな史跡等があり、紅葉とともに観賞しながら歩きます。

実施日：11月10日(木) 雨天中止

集 合：9時30分 JR 奥多摩駅前

行 程：奥多摩駅→奥氷川神社参拝→紅葉の氷川溪谷歩き→多摩川沿いの路→奥多摩さかな養殖センター(大型改良魚の奥多摩ヤマメ見学)→数馬峡橋(景勝地)→数馬隧道(昼食)→数馬の切通し(1700年頃の道)→白丸集落内散策(日本画家川合玉堂散策の道等)→白丸ダムと魚道見学→数馬峡と白丸湖畔歩き→JR 白丸駅(歩行時間は約4時間)

担 当：石井秀典、富澤克禮

持ち物：昼食、飲料水、敷き物、マスク、雨具、ストックなど

参加申込：11月5日までに下記へお申込みください

石井秀典：

富澤克禮：



会費納入のお願い

今年度会費(1500円)未納の会員はお振込みをお願いいたします。振込先などは会報179号をご確認願います。

--- 編集後記 ---

8月も下旬となり、秋の気配が感じられるようになりました。猛暑にコロナ、この夏は思うような山行や旅行が出来なかったのではないのでしょうか。これからもコロナの動向を注視しながら、秋のイベントが実施できるよう努めて行きたいと思えます。緑爽会で何度もお話をいただいた近藤信行氏が亡くなりました。近藤氏の追悼や思い出がありましたらお寄せください。(荒井正人)

久しぶりに皆さまが一同に会して語り合えた暑気払いを無事に終えることができ、大変嬉しく思いました。題字の『笑顔溢れた』が雰囲気を表わしています。コロナ禍はまだ大きな波が来るかもしれませんが、機会を捉えて同様な集まりを開催することを願っています。(小林敏博)

次号予告 <10月25日発行の主な内容>

9月山行報告、10月講演会速報ほか投稿など